

# 母親の養育態度における潜在的虐待リスク スクリーニング質問紙の信頼性と妥当性の検討

花田 裕子<sup>1)</sup>, 小西美智子<sup>2)</sup>

キーワード (Key words) : 1. 潜在的児童虐待リスク (child abuse potential risk)

2. 母親の養育態度 (mother's parenting) 3. 幼児 (infant)

本研究の目的は、母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙を作成して、その信頼性と妥当性の検討である。児童虐待予防と育児支援の視点から、適切な養育態度で子どものwell-beingへのリスクがない母親と不適切な養育態度の母親をスクリーニングするために補助的に活用する尺度を作成した。不適切な養育態度を直接尋ねる質問項目では、回答者への心理的な抵抗や虚偽の回答の高さにつながる可能性を考慮して質問文を肯定的な養育態度に変えて自記式の5件法の質問紙を作成した。3 - 6歳の幼稚園児母親407名(平均34.66歳 SD=3.82)および主養育者である祖母3名(50 - 56歳)を含む410名(平均年齢34.81歳 SD=4.19)からの回答を因子分析した。その結果、15項目からなる3因子が抽出された。第1因子「力に頼らない態度」第2因子「自己肯定感を育む態度」第3因子「自己抑制を教える態度」とした。質問項目全体の係数は0.8018で、各因子のアルファ係数は、第1因子0.7989、第2因子0.7174、第3因子0.8061で内的整合性があった。これら3つの因子は、身体的・心理的虐待と関連していた。質問紙はさらに検討する必要があるが、養育態度の潜在的身体的・心理的虐待リスクをスクリーニングする補助的な尺度として活用できると考えられた。

## 緒 言

日本でも、児童虐待が特殊な家族環境での問題ではなく、社会的な問題として広く関心を向けられるようになってきた。全国児童相談所の児童虐待報告件数は、1996年、4102件、1997年、5352件、2000年に10000件を超え2001年には24800件以上と増加している。2000年の児童虐待の防止等に関する法律施行後は、身体虐待・ネグレクトともに通告件数が増加している。これは、実際には通告件数の数倍の児童虐待が起こっている可能性があることを示唆している。虐待者の多くは実母父であり、子育て不安や親としての未成熟さや精神的な問題がもたらしたものが多いとされている<sup>1)</sup>。地域の保健所や保育所・幼稚園などの社会資源による子育て支援は、親子のwell-beingだけでなく虐待の予防と早期発見のためにも非常に重要となっている。2001年には子どもの虐待予防のための保健師活動マニュアルが全国の保健所に配布され虐待予防への指針として活用されつつあり、厚生労働省は子どもの虐待の予防と早期発見には市町村レベルでの取り組みが必要であるという見解を示している。今後、更に育児支援にかかわる専門職による潜在的な虐待リス

クを持つ養育者の早期発見と早期介入が期待されることが予測される。エリクソンは<sup>2,3)</sup>、子どもは3歳くらいまでに肯定的な自己認知とコントロール能力を獲得し、それ以後の6歳くらいで自分の意思や積極性を獲得していくと言っている。幼児期までの発達段階は、子どもの基本的な人生に対する見方の基盤を形成するものであり、社会化とその子ども固有の能力を発揮するために重要な段階である。子どものwell-beingには、子どもの心理社会的な発達を促進する親の養育態度が不可欠なものである。児童虐待は、子どもの発達を著しく阻害する養育態度であり子ども時代の被虐待体験は心理的なトラウマとなり成人後の生活へも大きな影響を与える<sup>4,6)</sup>。育児支援は、子どもの心身の発達への影響からも虐待を未然に防ぐためにも非常に重要になってきている。児童虐待のアセスメントでは、カナダ・オンタリオ州児童家庭サービスの調査結果を見ると重症例では差はないものの、あまり重症でないケースでは判定者によって差異が大きいことが明らかになっている<sup>7)</sup>。これは、児童虐待でも深刻な虐待に至る以前の発見の困難さの一端を示している。児童虐待は、基本的な生活習慣や社会化に必要な技術を身に付けるための躰という名目で親に虐待の自覚

・ Reliability and validity of a screening questionnaire for child abuse potential risk by mother's parenting

・ 1) 三重県立看護大学看護学部看護学科 2) 広島大学医学部保健学科看護学専攻

・ 広島大学保健学ジャーナル Vol. 3(1) : 55 ~ 62, 2003

がないままに家庭内の密室状態で行われがちである。平成10年の首都圏一般家庭対象の調査では、30%以上の母親に虐待あるいは虐待傾向があることが明らかになった。この調査では、17項目（性的虐待項目は含まない）の虐待行為が調査されているが、明らかな虐待行為項目で構成されているため、家庭での養育態度から虐待リスクを測ることはできない。親の養育態度の適切さは、親の子どもに対する部分的な言動で判断できるものではなく、また子どもに明らかな心身の問題が起きるなど問題が深刻化する前にリスクを特定することは困難なことといえる。児童虐待としつけとの境界を判断することは難しい問題であり、親の養育態度から潜在的リスクを予測することは児童虐待の予防と早期発見のひとつの方策として有効だと考えられる。

現在、養育関連尺度としては、育児不安尺度<sup>8)</sup>、日本版Parenting Stress Index<sup>9,10)</sup>養育態度尺度<sup>11,12)</sup>などがあるが、児童虐待と育児支援の二つの視点から親の養育態度をスクリーニングする尺度は見当たらなかった。本研究では、児童虐待予防と育児支援の視点から、適切な養育態度で子どものwell-beingへのリスクがない母親と虐待につながる可能性がある不適切な養育態度リスクを持つ母親をスクリーニングする補助的な質問紙を作成して信頼性と妥当性の検討することを目的とした。

## 対象と方法

### 1. 質問項目原案の作成と予備テスト

質問項目は、子どもの虐待防止センターが平成11年に実施した首都圏人口における児童虐待の疫学調査で使われた虐待17項目<sup>13,14)</sup>と厚生労働省家庭児童局が編集している子ども虐待対応の手引き<sup>15)</sup>、The ASPAC handbook on child maltreatment<sup>22)</sup>、米国およびスペイン語圏にも普及しているCAP (Child Abuse Potential Inventory) の関連文献など、PSI (Parent Stress Index) の関連文献POQ (Parent Opinion Questionnaire) および児童虐待・チャイルドマルトリートメントをキー・ワードに検索した文献から抽出した。日本の文献では、法律にも表記されている児童虐待 (child abuse) が使われているが、英文の文献では、80年代以降から欧米で広く使われているチャイルド・マルトリートメント (Child maltreatment) も多く使われている。この概念はBelsky<sup>20)</sup>が、虐待の発生状態は親が役割をうまく果たせないことで「不適切な扱い」を子どもにしている状況であり、生態学的な立場から個人・家庭・地域社会・文化環境の4つの側面から子ども虐待の要因を捉えていくことを提唱して80年代に欧米で広く使われるようになった<sup>21)</sup>。国際児童虐待常任委員会 (International Standing Committee on Child Abuse: ISCCA)<sup>23)</sup>や欧米の児童虐待の定義は、child

maltreatmentとしてabuseとneglectのそれぞれを定義して、文献では、abuseとmaltreatmentが同意語で使われていることが多かったため文献検索では、児童虐待 (child abuse) とチャイルド・マルトリートメントchild maltreatmentで検索を行った。さらに保育園・幼稚園の

表1 母親の養育態度における潜在的虐待に関連するしつけと育児行為質問53項目

1. 遊びや生活体験を多くさせている	ネグレクト
2. 基本的なルールやマナーは教えている	
3. 基本的な生活に必要なしつけは親の責任と考えている	
4. 大人の娯楽施設に連れて行くことは無い(パチンコ店・スナックなど)	
5. 一人で留守番をさせることはない	
6. 車の中に放置することはない	
7. 子どもの暴力的な行為はその都度注意する	
8. 栄養に配慮して食事とおやつを用意している	
9. 朝ご飯は毎日食べさせる	
10. 夜10時には寝かせている	
11. 衣類は清潔にしている	
12. 体温調整には気をつけている	
13. 毎日入浴させている	
14. 歯磨きや手洗いの習慣を教えている	
15. テレビやビデオは時間を決めて見せる	
16. 子どもの存在がうとましく感じることはない	心理的養育態度
17. 子どもの友達を知っている	
18. 健康状態に気をつけている	
19. いい悪いは一貫した態度でしつけている	
20. 感情的に叱ることはない	
21. 子どもの話をよく聞く	
22. 小さいことでも良いことは誉める	
23. 一生懸命なにかをやり遂げようとしているときは励ます	
24. 一人でできそうなことは見守る	
25. ぐずっても言いなりになることはない	
26. かんしゃくを起こしても言いなりになることはない	
27. 欲しがるものはすぐに与えることはない	
28. 細かく指図することはない	
29. 他の人に叱られるからやめなさいと言うことはない	
30. 兄弟姉妹と差別することはない	
31. 子どもを叱りすぎた後は抱きしめたり謝ったりする	身体的養育態度
32. 他の子どもと比較するようなことは言わない	
33. 親の心配するような子と遊ぶのを禁止することはない	
34. 部屋や風呂場に閉じ込めない	
35. 脅すことはない	
36. 毎日、抱っこしてあげる	
37. 毎日、寝るときは一緒にいる	
38. 頭や体を撫でてあげる	
39. 子どもによく運動をさせる	
40. 一緒に遊ぶことが多い	
41. 頭は叩かない	
42. 手は叩かない	
43. お尻は叩かない	
44. 物を投げつけない	
45. 戸外に閉め出さない	
46. 体をしばったりしない	
47. 蹴らない	
48. やけどをさせるようなことはしない	
49. 乱暴に腕を引っ張りたりしない	
50. 外出先に置き去りにしたことはない	
51. 車に乗せるときにシートベルトは必ず装着する	
52. バスや電車の中を一人で歩き回らせない	
53. 人ごみでは親のそばから離さない	

幼児教育者13名から“気になるまたは不適切に感じる親の態度”について聞き取りした内容を参考に、日常的な養育態度について児童虐待分類に適合させて“身体的養育態度”18項目“心理的養育態度”17項目“ネグレクト”18項目計53項目を作成した(表1)。53項目の内容妥当性は内容と分類については、児童精神科医1名(30年以上の治療経験者)、幼稚園教諭1名(経験20年以上)指導教官による評価を受けた。表面妥当性は、4名からのデータと質問項目に対する意見を20年以上の経験をもつ幼稚園教諭4名と検討後にその結果を踏まえて指導教官とともに検討して合意に達した項目を採択した。53項目のクロンバックの係数は0.8970と高い信頼性を示した。表面妥当性は、4名からのデータと質問項目に対する意見を20年以上の経験をもつ幼稚園教諭4名と検討後にその結果を踏まえて指導教官とともに検討して合意に達した項目を採択した。次に、回答者への心理的な抵抗や虚偽の回答の高さにつながる可能性を考慮して、質問文を不適切な養育態度を直接尋ねる質問項目から肯定的な養育態度に変えて自記式の5件法の質問紙を作成した。作成した質問紙を3-6歳の幼児をもつ母親4名(内1名はマルトリートメントハイリスク)に実施して、質問文の重複や質問内容の意図がわかりにくい表現などを訂正した。

## 2. 対象

養育態度と養育者の心理的影響因子に関する調査時に回収されたデータ416から、質問項目に不備がなくかつ社会的望ましき尺度(SDS)8点以下の410名を分析対象とした。分析対象の母親(主養育者)の年齢は25歳から56歳までで、母親407名の平均34.66歳(SD=3.82)で主養育者である祖母3名(50-56歳)を含む410名の平均年齢34.81歳(SD=4.19)であった。

## 3. 調査期間

平成13年9月より10月の約2週間。

## 4. 調査方法

- 1) 幼稚園に調査目的を口頭と文章で伝える
- 2) 幼稚園教諭から母親に口頭で協力要請を伝えてもらい、母親には調査用紙と共に研究目的と回答の自由とデータの守秘を文章にして配布。
- 3) 質問紙は幼稚園から母親に配布、回収は個別に研究者宛に郵送してもらった。

## 5. 倫理的配慮

- 1) 5ヶ所の幼稚園長に口頭および文書によって、研究目的の説明および回答者、幼稚園の匿名性が保護されることを説明して同意を得た。

- 2) 調査対象である母親へ研究の目的およびプライバシーの保護、回答を拒否する権利、研究結果の発表時幼稚園名および個人情報を保護することを文書にして個々に送付した。

- 3) 調査用紙の配布は各幼稚園に依頼、回収は郵送法によって行い回答に強制力が影響しないように配慮した。

## 6. 調査内容

本研究に関連した調査内容は感情的な態度と相談者の存在の程度 潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙53項目 社会的望ましき尺度(SDS)10項目<sup>23)</sup>(虚偽尺度として使用) 養育態度尺度30項目とした。

## 7. 分析方法

統計解析ソフトSPSS(ver10.)を用いて因子分析を行った。潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙53項目を項目分析によって75%以上の偏りのある17項目を除外した37項目を主因子法、バリマックス回転によって分析した。因子数2-7の因子分析を行い、固有値1、累積寄与率50%を目安として3因子に設定して共通性が0.4以下の20項目を除外した。抽出された16項目で再度因子分析を行い、因子負荷量が0.4以下及び因子負荷量が複数の因子に0.4以上の相関係数を検討して15項目を選択した。質問項目の因子分析および抽出された因子と子どもへの感情的な気持ちと相談者の有無との関連、および既存の養育尺度との検討を行った。

# 結 果

## 1. 尺度の構成概念妥当性

対象者410名のデータを、統計的に選択された15項目で主因子法バリマックス回転による因子分析の結果を表2に示した。第1因子に負荷量の高い項目は、「お尻は叩かない」「手は叩かない」「物を投げつけない」「頭は叩かない」「戸外に閉め出さない」「感情的に叱ることはない」「部屋や風呂場に閉じ込めない」の7項目で、暴力や威嚇的な態度によって萎縮することを自戒している養育態度であり「力に頼らない態度」と命名した。第2因子は「頭や体を撫でてあげる」「毎日、抱っこしてあげる」「小さいことでも良いことは誉める」「一緒に遊ぶことが多い」「子どもの話をよく聞く」の5項目で、子どもを尊重して固有の存在を肯定する養育態度であったので、「自己尊重を育む態度」と命名した。この2つの因子は、質問項目の身体的養育態度と心理的養育態度から構成されていた。「力に頼らない態度」には、心理的養育態度にあった子どもに恐怖を与えるような処罰をしない質問項目が含まれていた。身体的養育態度には、身体的肯定

表2 母親の養育態度における潜在的虐待質問項目の回転後の因子分析結果 (n=410)

項目	因子		
	1	2	3
-43.お尻は叩かない	.721	-.019	.051
-42.手は叩かない	.715	-.013	.076
-44.物を投げつけない	.603	-.013	.094
-41.頭は叩かない	.580	.273	.031
-45.戸外に閉め出さない	.586	.128	-.044
-20.感情的に叱ることはない	.442	.382	.195
-34.部屋や風呂場に閉じ込めない	.436	.190	.023
-38.頭や体を撫でてあげる	.011	.692	-.042
-36.毎日、抱っこしてあげる	.129	.652	.027
-22.小さいことでも良いことは誉める	.106	.554	.080
-40.一緒に遊ぶことが多い	.200	.536	.076
-21.子どもの話をよく聞く	.171	.517	.128
-26.かんしゃくを起こしても言いなりになることはない	.081	.011	.924
-25.ぐずっても言いなりになることはない	.076	.108	.808
-27.欲しがるものはすぐに与えることはない	.016	.092	.570
因子負荷 2 乗和	2.69	1.12	1.95
寄与率 (%)	16.80	13.27	12.27
累積寄与率 (%)	16.80	30.07	42.27

的コミュニケーションである身体接触を項目に含めて作成したが、これらの質問項目は自己尊重感に関連した因子として抽出されていた。第3因子は、「かんしゃくを起こしても言いなりになることはない」「ぐずっても言いなりになることはない」「欲しがるものはすぐに与えることはない」の3項目で、子どもの欲求を統制する態度であり、子どもに自己抑制を教える項目であったので「自己抑制を教える態度」と命名した。この因子には、心理的養育態度の質問項目のみが含まれていた。抽出された因子には、当初予期していたネグレクトが含まれていない。ネグレクト質問項目は「車の中に放置しない」「衣類は清潔にしている」「一人でする番をさせることはない」などであったが、調査対象が子どもを幼稚園に通園させていることを考慮すると子どもに対する関心が低かったり知識が極端に不足する対象は含まれなかった可能性がある。抽出された因子は、児童虐待分類との関連性で見ると、第1因子「力に頼らない態度」は、質問項目の構成からの身体的虐待と心理的虐待のリスクの低さに関連し、第2因子「自己尊重を育む態度」は、心理的虐待リスクの低さと関連する養育態度であることが予測される。第3因子「自己抑制を教える態度」は、親が適切な制限を与えることは子どもにとって適応性を高め安心感を与えることから心理的虐待リスクの低さとの関連を予測できる養育態度である(表3)。潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙は、育児支援のニーズを測定して家庭における身体的・心理的虐待の潜在的リス

表3 各因子の平均値と標準偏差

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
力に頼らない養育態度	0	35	26.73	6.238
自己尊重を育む養育態度	0	25	21.29	3.611
欲求を統制する養育態度	0	15	12.45	2.581

表4 母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問項目

因子名	質問項目
1 力に頼らない養育態度	1) お尻は叩かない 2) 手は叩かない 3) 物を投げつけない 4) 頭は叩かない 5) 外に閉め出さない 6) 感情的に叱ることはない 7) 部屋や風呂場に閉じ込めない
2 自己肯定感を育む養育態度	1) 頭や体を撫でてあげる 2) 毎日、抱っこしてあげる 3) 小さいことでも良いことは誉める 4) 一緒に遊ぶことが多い 5) 子どもの話をよく聞く
3 自己抑制を教える養育態度	1) かんしゃくを起こしても言いなりになることはない 2) ぐずっても言いなりになることはない 3) 欲しがるものはすぐに与えることはない

クレベルを測定することが可能な構成概念妥当性のある質問紙といえる。

## 2. 信頼性の検討

内的整合性を検討するために質問項目全体と因子別に Cronbach の係数を算出した。全体の係数は0.802、因子別では0.799、0.717、0.806であり信頼性内的整合性が高い測定項目であった。各因子の平均値・標準偏差・最小値・最大値を表4に示した。折半法による信頼性係数はSpearman-Brownの公式0.9479、Guttman折半法信頼係数0.9279であった。最終的に3因子15項目が母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問項目を作成した(表4)。

3. 子どもへの感情的な気持ちと相談者の有無との関連  
潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の3因子と、子どもへ感情的に接することが「ある」「すこしある」「ない」、子育てで困ったときに相談できる人がいるかを「いる」「少しいる」「いない」の3項目を<sup>2</sup>検定した(表5-10)。子どもへ感情的に接すること養育態度には3因子とも高い有意差があった。養育態度と母親の安定した感情が強く関連していることは従来の認識を確認していた。子育てで困ったときに相談できる人がいるかでは、「自己抑制を教える態度」に強い相関があり、相談者を持たない母親は、心理的な虐待リスクが高い可能性があると考えられる。母親の相談者との関係を形成す

表5 因子1 ; 子どもへ感情的な接し方と養育態度の<sup>2</sup>検定

	感情的に接しない	少し接する	よく接する	N
態度良群 100%	6 (50%)	3 (25%)	3 (25%)	12
態度悪群 100%	18 (4.5%)	123 (31%)	256 (64.5%)	397

$\chi^2 = 44.0$      $df = 2$      $p < 0.001$

表6 因子2 ; 子どもへ感情的な接し方と養育態度の<sup>2</sup>検定

	感情的に接しない	少し接する	よく接する	N
態度良群 100%	10 (17.5%)	25 (43.9%)	22 (38.6%)	57
態度悪群 100%	14 (4.0%)	101 (28.7%)	237 (67.3%)	352

$\chi^2 = 25.4$      $df = 2$      $p < 0.001$

表7 因子3 ; 子どもへ感情的な接し方と養育態度の<sup>2</sup>検定

	感情的に接しない	少し接する	よく接する	N
態度良群 100%	12 (11.4%)	37 (35.3%)	56 (53.3%)	105
態度悪群 100%	12 (3.9%)	89 (29.3%)	203 (66.8%)	304

$\chi^2 = 10.6$      $df = 2$      $p < 0.005$

る社会的スキルと子どもの心理社会的な発達を促進する養育態度との関連を示している。相談者の存在と「力に頼らない養育態度」との関連はなく、相談者の存在と親の権威的な力をコントロールする態度がなぜ関連していないかはわからなかった。しかし「力に頼らない養育態度」が低い親は、相談者がいても自分の子どもへの暴言や暴力への罪悪感があって話せないという母親の声<sup>24, 25)</sup>と一致していた。あるいは、相談者が存在しても子どもへの厳罰主義を正しいと認識している場合も考えられる。

#### 4. 既存の尺度との相関の検討

既存の養育態度尺度は、鈴木らが1985年に開発した親の子どもに対する態度を測定する尺度で、3つの下位尺度は、愛情・統制・統制不能あるいは一貫性の低さの3次元により「受容的・子ども中心のかかわり」「統制的のかかわり」「責任回避的のかかわり」である。質問項目は、各10項目計30項目によって構成されている。「受容的・子ども中心のかかわり」には、<子どものことに十分気を配っている><自分にとって子どもは何より大切だ>などの愛情の受容と拒否に関連した質問項目が含まれ、「統制的のかかわり」には、<子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは正しいことだと思う><子どもに自分で物事を決めさせることはあまりない>などの処罰的抑圧的な質問項目含まれている。「責任回避的のかかわり」には一貫性のなさや統制ができない服従的な質問項目<子どもが同じことをしても時によって叱かったりほうって

表8 因子1 ; 育児で困ったときの相談者の存在と養育態度の<sup>2</sup>検定

	相談者がいる	相談者が少しいる	相談者がいない	N
態度良群 100%	7 (58.3%)	5 (41.7%)	0	12
態度悪群 100%	252 (63.5%)	123 (31%)	22 (5.5%)	397

$\chi^2 = 1.14$      $df = 2$

表9 因子2 ; 育児で困ったときの相談者の存在と養育態度の<sup>2</sup>検定

	相談者がいる	相談者が少しいる	相談者がいない	N
態度良群 100%	41 (71.9%)	13 (22.8%)	3 (5.3%)	57
態度悪群 100%	218 (61.9%)	115 (32.7%)	19 (5.4%)	352

$\chi^2 = 2.30$      $df = 2$

表10 因子3 ; 育児で困ったときの相談者の存在と養育態度の<sup>2</sup>検定

	相談者がいる	相談者が少しいる	相談者がいない	N
態度良群 100%	77 (73.3%)	27 (25.7%)	1 (1%)	105
態度悪群 100%	182 (59.9%)	101 (33.2%)	21 (6.9%)	304

$\chi^2 = 8.79$      $df = 2$      $p < 0.05$

おいたりしてしまう><子どもの言いなりになるほうだ>などが含まれている。

質問紙の下位尺度間では、第1因子「力に頼らない態度」は、「受容的・子ども中心のかかわり」( $r=0.364$ )とやや高い相関が認められた。第2因子「自己尊重を育む態度」は「受容的・子ども中心のかかわり」との間に( $r=0.567$ )と高い相関があった。第1因子「力に頼らない態度」と第2因子「自己尊重を育む態度」の高い親は、子どもを受容するかかわりと相関が高く、一貫した懲罰的でない統制的のかかわりと責任回避的なのかかわりとはごく弱い相関が認められた。第3因子「自己抑制を教える態度」は「統制的のかかわり」との相関は全くなく( $r=-0.38$ )「責任回避的のかかわり」( $r=0.357$ )とやや高い相関が見られた。第3因子「自己抑制を教える態度」の高い親は、子どもに対して懲罰的なのかかわりの傾向がないと言える。しかし弱いながらも責任回避的のかかわりとの相関があり、第3因子の子どもへ一貫性のある統制的な態度との矛盾した結果であった。

## 考 察

本研究では、児童虐待予防と育児支援の視点から養育態度の潜在的リスクレベルをスクリーニングする質問用紙を作成し、その信頼性と妥当性の検討をした。因子分析の結果、本尺度は児童虐待のなかでも身体的・心理的虐待につながる可能性のある不適切な養育態度を予測する「力に頼らない態度」「自己尊重を育む態度」「自己抑

制を教える態度」の3因子が抽出された。身体的虐待に関連する因子として「力に頼らない態度」が、心理的虐待には3つのすべての因子が関連していた。3因子間の相関係数に高い相関はなかったことから、心理的虐待には複数の因子が影響していると考えられる。また、子どもの向社会的な行動に関する研究<sup>26, 27)</sup>では、子どもの向社会的な行動は重要他者の模倣による学習であり、子どもにきちんとした説明をする親と力による懲罰的な態度をとる親では子どもの向社会的な発達は大きく違い、子どもが望ましい行動をとったときに親が承認していくことで子どもの向社会的な傾向は強化される。一方、親の厳しいしつけは身体虐待のリスクと親の権威主義、愛情を伴うアタッチメントの低さが関連していることが指摘されている<sup>28)</sup>。これらのリスク因子は、身体虐待だけでなく子どもへの暴言や無視などの心理的虐待にも通じる養育態度である。Fanagyの研究<sup>29)</sup>では、虐待は子どもの自己概念の発達を阻害して自己の信念や感覚、希望、計画能力の獲得を困難にすることが明らかにされている。これらの研究結果は、潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の「力に頼らない態度」が、身体的虐待リスクに関連する因子として、「力に頼らない態度」「自己尊重を育む態度」「自己抑制を教える態度」が心理的虐待リスクに関連している結果と一致している。養育態度の複数の因子が心理的虐待に関連しているのは、心理的虐待が身体的虐待よりも発見が難しいことを反映していることを示している可能性もあり、心理的虐待と養育態度の関連について詳細に検討していく必要がある。

感情的な態度で子どもに接する母親は、3因子すべてと有意差があり、身体的・心理的虐待リスクが高い可能性が予測された。育児で困ったときに相談する人の存在は、第3因子とのあいだに有意差あり、相談者がいない母親は子どもの自律を促進するようなかかわりが困難な母親は相談者が身近にいないため育児ストレスとの関連も考えられリスク予備軍の可能性もあり、今後は母親の育児ストレスの調査も同時に実施する必要がある。これらの結果は、児童虐待の関連因子としてよく知られている結果を検証していた。しかし第1因子、相談者の存在の相関はなく、これは母親が暴言や暴力は自覚していても相談しにくい状況と一致しているが本調査では確認することはできなかった。相談相手が存在しても母親との信頼関係の深さも影響することであり今後さらの詳細な検討が必要である。第2因子は、母親自身が幼児期にほめられたり認められる養育体験との関連からも分析していく必要がある。

既存の養育態度との関連を検討すると、「自己尊重を育む態度」の高い母親は、受容的かかわりとの相関が最も高く、「自己抑制を教える態度」と統制的かかわりは相関がなかった。既存尺度での統制的かかわりの質問項

目は子どもを親の懲罰的な態度や自律性を抑制する内容であり、これらの関連は本スクリーニング質問項目の2つの下位尺度の構成概念を支持する結果であった。しかし「自己抑制を教える態度」と責任回避的かかわりに弱いながら相関が認められ、今後質問項目間の詳細な検討と、今後の調査では他の既存尺度を用いて虐待行為との関連を検討する必要が明示された結果であった。

本質問項目は、総得点で虐待のリスク度を判別するのではなく、抽出された3つの下位尺度の得点それぞれから母親の養育態度傾向を見ていくものであり、得点が高い対象は虐待リスクが高い可能性を予測して個々の質問項目から必要な援助計画立案に補助的な情報源としても活用が可能である。これは質問項目が少ない事によって可能である。しかし、養育行為の危険度のレベル差や類似する質問項目の精選は調査を継続する過程で検討を続ける必要があり、反対に依存症に関する質問項目が少ないなど質問項目を改善して調査を行う必要がある。次の調査では、母親の養育態度傾向のみでなく実際に虐待ハイリスク対象をスクリーニングできているかを検証するために、首都圏における一般人口における児童虐待調査で用いられた虐待17項目も次回の調査時に実施する必要性が示唆された。各下位尺度における内の一貫性と折半法による信頼性は高く、信頼性のある質問紙であることが示されたが、本研究は子どもを幼稚園に通園させている対象に限定されている結果であり今後は対象を広げて調査を行って精度を高める必要がある。

## 研究の限界と課題

本研究では、対象が幼稚園に通園中の子どもをもつ母親のみであり、若年親も含まれていないため結果に偏りがあることが考えられる。ネグレクトをスクリーニングする因子が含まれていないことを考慮して活用していく必要がある。また心理的虐待リスクと養育態度について詳細な検討を重ねたい。本質問紙は開発途上であり虐待のハイリスク状態の母親のデータとの検討を行い本質問項目が潜在的虐待リスクをスクリーニングできるものであるかを検証する必要がある。また、子育てと言う繊細な行為についての質問調査なので正直な回答を得るために、倫理的な配慮と個人名の特定が研究者にもできない調査用紙の扱い方を記述した依頼文を添付して返送を無記名で直接研究者へ郵送すること、虚偽尺度としてSDSを用い、先行研究を参考に得点8点以下の回答者のデータは回答者の「こうありたい」という理想回答の可能性が高いと判断して分析からはずした。しかし今回はSDS 8点以下の対象者が少なく8点以上の対象と7点以下の対象との比較検討はできなかった。これらのことは本調査の限界である。

## 謝 辞

調査にあたりご協力をいただいた幼稚園, 保育所の関係者および母親の皆様に感謝いたします。

本研究は, 日本学術振興会科学研究補助を受けた。

## 文 献

1. 岩田泰子: 児童虐待. 国際医書出版. 臨床精神医学 24 : 1053-1059, 1995
2. Ericson, HE. (1963) 仁科弥生 訳: 幼児と社会. みすず書房, 239 - 332, 1977
3. Ericson, HE. (1982) 村瀬孝雄, 近藤邦夫 訳: ライフサイクル, その完結. みすず書房, 69 - 112, 1989
4. Kaufman, J. and Zigler, E. : Do Abused Children Become Abusive Parents?. American Journal of Orthopsychiatry, 57 : 186-192, 1987
5. Kent, A. and Waller, G. : The Impact of Childhood Emotional Abuse: An Extension of the Child Abuse and Trauma Scale . Child Abuse & Neglect, 22 : 393-399, 1998
6. Koniak-Griffin, D. and Lesser, J. : The Impact of Childhood Maltreatment on Young Mother's Violent Behavior Toward Themselves and Others . Journal of Pediatric Nursing, 11:300-308, 1996
7. Trocme, N., McPhee, D. and Tam Kwok, K. : Child Abuse and Neglect in Ontario. Incidence and Characteristics. Child Welfare, 563-586, 1995
8. 牧野カツコ: 乳幼児をもつ母親の生活と < 育児不安 > . 家庭教育研究所紀要, 3:34-55, 1982
9. Loyd, BH. and Abidin, RR. : Revision of the Parenting Stress Index . Journal of Pediatric Psychology, 10 : 169-177, 1985
10. 奈良間美保, 兼松百合子, 荒木暁子 他: 日本版 Parenting Stress Index(PSI)の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究, 58(5):610-616, 1999
11. 鈴木眞雄, 松田 惺, 永田忠夫 他: 子供のパーソナリティー発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成. 愛知県教育大学研究報告 34 (教育科学編): 139-152, 1985
12. 堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊 編: 心理尺度ファイル. 垣内出版. 358-364, 2000
13. 社会福祉法人 子どもの虐待防止センター: 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書. 平成11年度社会福祉・医療事業団子育て支援基金助成事業. 社会福祉法人 子どもの虐待防止センター. 1-102, 2000
14. 妹尾栄一, 大原美知子, 萱間真美: 一般人口における児童虐待の実態. アディクションと家族, 16: 459-469, 1999
15. 厚生省児童家庭局: 子ども虐待対応の手引き. 財団法人 日本児童福祉協会. 19-23, 1999
16. Milner, JS. : Development of a lie scale for the child abuse potential inventory Psychological Reports, 59 : 871-874, 1982
17. Milner, JS. and Gold Ruth, G: Screening spouse abuse for child abuse potential. Journal of Clinical Psychology, 42 : 169-172, 1986
18. Azar, ST., Robinson, DR. and Hekimian, E. et al. : Unrealistic Expectations and Problem-Solving Ability in Maltreating and Comparison Mothers.: Journal of Consulting and Clinical Psychology, 52 : 687-691 , 1984
19. Azar, ST. and Rohrbeck, CA. : Child Abuse and Unrealistic Expectations: Further Validation of the Parent Opinion Questionnaire . Journal of Consulting and Clinical Psychology, 54 : 867-868, 1986
20. Belsky, J. : Child Maltreatment An Ecological Integration . American Psychologist, 35 : 320-335, 1980
21. 鶴飼奈津子: 児童虐待の世代間伝達に関する一考察. 心理臨床学研究, 18 : 402-411, 2000
22. Briere, J., Berliner, L. and Bulkley, JA. et al.: The APSAC handbook on child maltreatment. SAGE Publications. Inc. 14-27. 53. 159. 183: 230-235, 1996
23. 北村俊則, 鈴木忠治: 日本語版 Social Desirability Scaleについて. 社会精神医学 9 : 173-180, 1986
24. プチタンファン編集部: 「読んでくれてありがとう」. 婦人生活社. 16-62, 1996
25. 保坂 渉: 虐待 - 沈黙を破った母親たち - . p.141-204. 岩波書店, 2000
26. Anderson, C L.: Assessing Parenting Potential for Child Abuse Risk. Pediatric Nursing, 13 : 323-327, 1987
27. Zahn, W., C., Radke, YM. and King, RA.: Child Rearing and Children's Prosocial Initiation towards Victims of Distress . Child Development, 50 : 319-330, 1979
28. Milner, JS. : Assessing Physical Child Abuse Risk: The Child Abuse Potential Inventory. Clinical Psychology Review, 14 : 547-583, 1994
29. Fanagy, P. and Target, M. : Attachment and reflective function their role in self-organization. Development and Psychopathology, 9 : 679-700, 1997

# Reliability and validity of a screening questionnaire for child abuse potential risk by mother's parenting

Hiroko Hanada<sup>1)</sup> and Michiko Konishi<sup>2)</sup>

1 ) School of Nursing, Mie Prefectural College of Nursing

2 ) Division of Nursing, Institute of Health Sciences, Faculty of Medicine, Hiroshima University

Key words : 1 . child abuse potential risk 2 . mother's parenting 3 . infant

The purpose of this study is to examine the reliability and validity of questions given to mothers about parental attitudes which signal an underlying risk of abuse. From viewpoint of child abuse prevention and child care support, I developed an auxiliary questionnaire aimed at screening mothers whose parental attitudes directly might give rise to psychological resistance and false answers, so the questions were positively worded to measure the appropriateness of responds' attitudes on a scale of 1 though 5. Results from 407 mothes(mean=34.81, SD=4.19) and three main caregivers (range50-56) who have 3-6 yearoldkindergarteners(mean = 34.66, SD=3.82) were analyzed. From 15 items, a factors. 1. "Rearing attitudes that do not depend on power" 2. " Rearing attitudes which engender a feeling of self= esteem" 3. " Rearing attitudes which teach control of desire". The overall internal consistency of items, as reflected in Crobach's , was 0.8018. For factors 1, 2 and 3 the values of were 0.7989, 0.7174 and 0.8061, respectively.

The questionnaire items based on these 3 factors measure the risk of abuse. Though they do not correspond directly with the classification of abuse, the questionnaire items based on these 3 factors.

Related to physical abuse and psychological abuse could be used as an auxiliary questionnaire to measure parental attitudes showing a maltreatment potential.